御前埼灯台

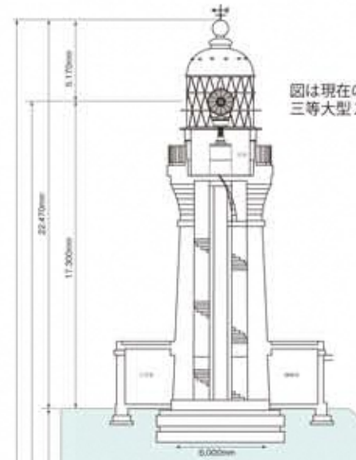
静岡県最南端の岬の洋式灯台
その建設と経緯

海外との貿易がはじまった明治時代と灯台

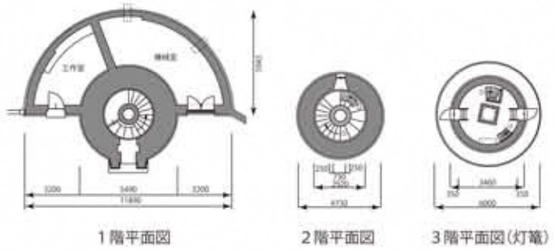
幕末になると開国、通商を求めて諸外国の船がやって来ます。文久３年（1863年）、長州藩がアメリカ、フランス、オランダの艦隊を砲撃するという下関事件が起き、その賠償として東京湾周辺など８カ所に洋式灯台の設置を求められました（改税約書、通称江戸条約）。

これを受けて、明治新政府は明治元年（1868年）11月１日に観音埼灯台の建設に着手します（全国灯台記念日）。

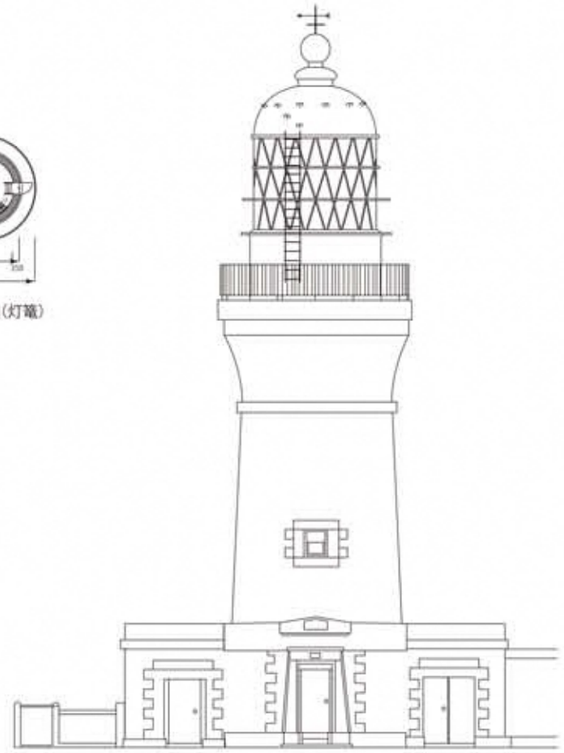
御前埼灯台は、政府が招聘した英国人技師、リチャード・ヘンリー・ブラントンの調査、進言もあって明治５年（1872年）５月26日に着工します。



御前埼灯台 灯塔平面図



御前埼灯台 灯塔立面図



メタルハライドランプ 250W

初代の一等８面レンズ
（写真は犬吠埼灯台資料館）

現在の三等大型２面レンズ
灯室南西方向

国内初の一等閃光レンズを搭載して完成

御前埼灯台は、２年の歳月を費やして明治７年（1874年）５月１日完成、点灯を開始しました。当時はフランスのソーター・ハーレー社製の回転式一等閃光レンズ（高さ259㎝）を国内で初めて搭載し、遠州灘を航行する船の道しるべとして活躍してきました。

しかし、昭和20年（1945年）７月、第二次世界大戦（太平洋戦争）中、米軍艦載機の攻撃を受けてレンズや灯器、回転機械が破壊されてしまいました。昭和24年（1949年）、戦後の復旧工事により現在の三等大型２面レンズ（高さ157㎝）が搭載され、昭和58年（1983年）には東海地震にも耐えられるよう灯塔の補強工事が行われ、現在も現役で御前崎の海を照らしています。

御前埼灯台の概要

明治完成当時	要目	現在
白色、煉瓦石造円形	塗色・構造	白色、塔形（レンガ石造）
単閃白光 30秒に１閃光	灯質	単閃白光 毎10秒に１閃光
67,500燭光	光度	56万カンデラ（実効光度）
19.5海里（約36km）	光達距離	19.5海里（約36km）
南45度７分西より西北東を経て南71度54分東迄242度19分間	明弧	221度から104度（船舶から見た角度）
基礎から灯火まで5丈7尺（17.3m） 水上から灯火まで17丈3尺（52.42m）	高さ	地上から構造物の頂部まで22.47m 平均水面から灯火まで54.0m 地上から灯火まで17.3m
フランス製第一等フレネル式閃光レンズ（８面型） 高さ2,590mm、焦点距離920mm	レンズ	国産第三等大型フレネル式閃光レンズ（対向型） 高さ1,576mm、焦点距離500mm
フレネル式灯器、石油蒸発式灯器 ランプ（灯口　一個４重心）	光源	商用電力、非常用：発動発電機（13PS 5 KVA） 電球：メタルハライドランプMT250E-W/PG
常駐の灯台番（灯台守）	監視	清水海上保安部より有線監視

※現時数値は2020年２月25日清水海上保安部提供
１カンデラ＝1.0067燭光

設置・点灯日	明治7年（1874年）５月１日		
所在地	静岡県御前崎市御前崎字燈明1518番地	総建設費用総額	33,314円42銭１厘　旧御前崎町資料より
位　置	北緯34度35分45秒　東経138度13分32.6秒	工事費	25,236円96銭９厘　燈光会資料より

御前埼灯台建設当時の物価

白米10kg 36銭　清酒上等 4銭　はがき 1銭　かけそば 8厘　うな重 20銭　新聞（毎日新聞朝刊月きめ）32銭

明治７年（1874年）から御前崎の海を見守る「のぼれる灯台」

御前埼灯台は、全国16基ある「のぼることができる灯台」のひとつです。全高は約22m、岬の高さを含む海面から灯火までの高さは約54mになります。御前埼灯台の踊り場の回廊からは、地球が丸く見える大海原を眼前に臨めることができます。

また、御前崎は灯台下の岬を囲むように県道357号が整備されています。西は尾高海岸からサンロード、東は御前崎グランドホテルを越えた辺りから、高台にそびえる御前埼灯台の姿をさまざまな角度から楽しめます。約150年の歴史を持つ御前埼灯台は、これからも静岡県最南端の岬の灯台として、多くの人の心に光り続けることでしょう。

御前埼灯台を守る会 監修 2020年 作成